

# 翔

2006 December

No.183

百万石蝶談会

## 金沢市街地に於けるコシボソヤンマの記録

浅地 哲也

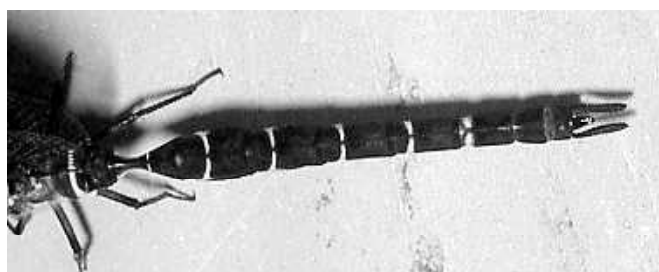
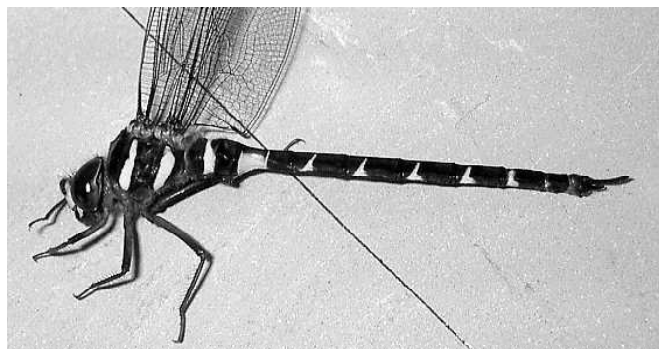
本種は、かつて石川県下、金沢市内でも広く分布が認められた種であったが、石川県発行のレッドデータブックでは、準絶滅危惧にランクされている。しかしながら、近年各地で本種の生息の報告がなされている。

今回、金沢市の市街地より成虫、幼虫が記録されたので報告する。

2006年7月10日	金沢市高柳町の屋内園芸資材売場	1♂	小幡英典
2006年6月5日	金沢市大豆田本町犀川左岸	1幼虫	浅地哲也
2006年8月16日	金沢市大豆田本町犀川左岸	1幼虫	浅地哲也

筆者は、犀川中下流域のトンボ幼虫観察を行っているが、同地点で今年初めて本種を確認することができた。今回の記録は単年度の記録ではあるが、トンボ生息に適した環境が改善傾向にあるのか、今後とも周辺地域で観察を続けたい。

末筆ではあるが、コシボソヤンマの記録を御教示いただいた小幡英典氏、御連絡いただいた松井正人氏に厚く御礼を申し上げる。



2006年7月10日 金沢市高柳町で観察された♂

### <参考文献>

浅地哲也(2001)コシボソヤンマを採集. とっくりばち(68):26.

浅地哲也(2004)キイロサナエの記録とヤマサナエとの棲み分けについて. 翔(169):6.

石原一彦(2004)志雄町でコシボソヤンマを採集. とっくりばち(72):26.

石川県編(2000)石川県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編):100.

武藤 明(2001)石川・福井のトンボ資料(2000). とっくりばち(68):4-7.

武藤 明(2002)2001年~2002年4月分の昆虫資料. とっくりばち(69):8-11.

武藤 明(2004)石川県のトンボに関する知見(2003-2004). とっくりばち(72):1-4.

《あさじてつや 〒921-8021 石川県金沢市御影町26-7》

## 石川県で5月にムラサキツバメの孵化殻多数を発見

松井 正 人

ムラサキツバメは、従来、東日本には分布していなかったが、近年になって日本国内で顕著な北進が観察され、2005年には福島県に至る各県で観察されていた。石川県においては、1992年に1頭の成虫が記録されたが、続く記録はなく、2005年になって県内各地で発生が確認された。ムラサキツバメの幼虫は、主にマテバシイやシリブカガシの新葉を食べて成長するが、石川県内には、どちらも自然状態では生育せず、公園や街路に植えられたマテバシイを食樹として利用していた。

2006年になり、前年にムラサキツバメが大発生した金沢市西部緑地公園で、マテバシイの新葉が伸びてきた5月5日に、発生しているのか調査を行った。新葉には、幼虫の食痕は無く、産卵もされていなかった。そこで、地際から高さ2mまでの成葉裏面を調べたところ、地上50cmまでの葉裏から、多数の孵化殻とともに少数の孵化していない卵が見つかった。卵は、地際にあったせいか、いずれも汚れていて、ほとんどが1葉に1卵で、1葉に2卵が有る場合は間隔は1cm以上空いていた。

2006年5月5日 金沢市袋島西部緑地公園 孵化殻29卵、未孵化4卵 松井正人

孵化していない卵を、飼育ケースに入れ孵化を待ったが、いずれも孵化しなかった。今回見つかった卵は、孵化殻が有るのに幼虫の食痕が全くないこと、見つかった全ての卵が汚れていること、未孵化の4卵が孵化しなかったこと、などから考えると、前年に産まれた卵が、冬季の季節風や悪天候にも脱落せず、そのまま葉裏についていたものと思われる。



ムラサキツバメの孵化殻と孵化していない卵が見つかったマテバシイの1本。前年に、たくさんの幼虫が付いていた木で、孵化殻と孵化していない卵は、新葉に近い成葉からは見つからず、地際に近い高さ50cm以下の成葉の裏面から見つかった。

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

## 中西氏との思いでのヒゲナガホラヒラタゴミムシの採集記

井村 正行

1993年春のゴールデンウィークの頃、かねてより、未だ採集したことのないメクラチビゴミムシにチャレンジしようと思ったが、しかし珍品、一人では荷が重そうと思った私は、ムシ仲間でライバルでもある中西重雄氏を、この計画に誘い込む事にした。彼には、「これは大変珍品で採り難いムシである」とかなんとか誘いを掛けたところ、氏は大変乗り気で、二つ返事でOKしてくれた。ふたりで作戦会議。安易な採集として洞くつ採集、難易度の高い採集としては、沢のガレバの石崩しが、案に上がった。意外にも中西氏が、おあつらえ向きの洞くつを知っていた。そこで、当然安易な方で試みることとなった。

そこは、合相谷の石切場の跡で、過去に凝灰岩を採掘していたそうである。犀川の中流域の左岸に掘られた横穴は、入り口は大きく掘られ40m程入ると真っ暗闇となる。その奥は、きつい斜面となり足場も良くない。また、幾つもの上下縦横に穴が掘られていた。奥までは、入り口より200m程あり、横穴もいくつもある。足下には、石の削りクズが積もり、その上にはコウモリの糞がうず高く積もり、異様な光景が広がっている。早々に、懐中電

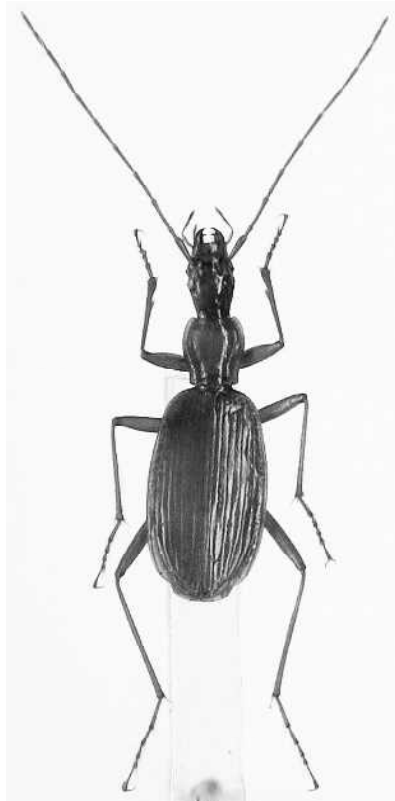
灯の光を頼りに、コウモリの糞の近くの石をまくる。しかし、出てくるのは、カマドウマや白い小さなトビムシ？、地下性と思われる薄いピンクのヤスデくらいで、時々マガロアムシの幼生を見るくらいだった。

1時間も、この不気味な空間での採集をやれば、二人とも飽きるには十分な時間だった。これでは、なかなか結果が出ないと思った二人は、安直にトラップを仕掛ける事にした。中西氏の家で、オサムシ用のトラップ液と、コンビニでビニールコップを買い、洞くつの10カ所にトラップを仕掛けた。微かな期待感を持って、三日後にトラップ回収に出かけた。暗闇で見ても解らないと思い、コップごと回収し外の明るい所で確認する。ゴミムシが2種5頭入っているが、期待したメクラチビゴミは、



1986年10月音羽山にて(左:筆者、右:中西氏)

やはりいなかった。採集した1種は、チャイロホソモリヒラタゴミムシで、自分も採集した事があったが、もう1種はよく分からない。家に持ち帰り図鑑で確認するが、*Jujiroa* 属に大変似ていると思えるが、私の知識じゃ確信が持てない。というのも、*Jujiroa* 属は日本海側ではこれまで発見されず、分布しないと思われていた。そこで、ゴミムシの専門家である高羽正治氏に同定を依頼した。流石に高羽氏は、一見して新種の*Jujiroa* 属と確信したようで、その権威である上野俊一博士に標本を送り、めでたく新種記載された。



ヒゲナガホラヒラタゴミムシ  
*Jujiroa imunada* S.UENO 1993



イオウゼンメクラチビゴミムシ  
*Trechiama medicirex* S.UENO 1989

最初の発見から新種として記載される間、本種の分布調査には、澤田 博氏に金沢周辺の石切場跡の地図を入手してもらい、調査には上田 昇氏も加わって精力的に行い、犀川周辺の他、数カ所の石切場跡の洞くつでも、生息を確認する事が出来た。9月下旬には上野俊一博士が来県され、現地調査に同行した。目的であったメクラチビゴミ（イオウゼンメクラチビゴミムシ）やオオバヤシチビシテムシ（県未記録）なども採集できた。また、*Jujiroa* の新種名には、井村（イムラ）、中西（ナカニシ）、上田（ウエダ）の三人の名前から、それぞれイム、ナ、ダをとり、*imunada* と付けてもらった。

故中西氏と、このような楽しい採集が、これから出来ないと思うと大変寂しい思いでいっぱいになる。中西氏へ、心よりのご冥福をお祈り申し上げます。

《いむら まさゆき 〒920-0211 金沢市湊1-128》

## スーパー虫屋だった中西重雄氏

野中 勝

中西さんとの最初の出会については、記憶がない。だが、その後まもなく、1983年の秋に白山の釈迦道へ、フジミドリシジミの採卵に同行した時のことは、鮮明に覚えている。当時の私は、多少とも経験を積んだ蝶屋で、特にゼフの採卵に熱中していた。それまでまともに採卵したことのないフジについても、ツーイーソーなどからの知識としてブナのひこばえを捜すべきことを知っていた。一方の中西さんは、ほんの駆け出しの蝶屋、当然私はゼフの採卵技術の手ほどきをしてあげるつもりで出かけた。ところが、現地についてみると、奥多摩など太平洋側のイヌブナに関して記されていた本からの知識はまったく通用せず、捜そうにも釈迦道のホンブナには、ひこばえなど存在しないのであった。そうなるに非力な私にはなすすべもなく、あてもなくブラブラするのみであった。信じられないことに、初心者の中西さんは、短時間のうちにブナ林内部の小木の枝先がポイントになることを見抜いて、しっかりと採卵していた。言われた通りにやってみれば確かに私にも採卵でき、以来石川県のフジの採卵はそれほど困難ではないと認識されるようになったのである。既知の知識に捕われず、現場で臨機応変に創意工夫をして、難しいと考えられていた種を採集してしまう。これが、以後も何度も繰り返された中西さんの採集であり、私が氏をスーパー虫屋と呼ぶ由縁である。

中西さんが採集法を確立したり新産地を開発した虫は枚挙に暇がないが、私が中西さんの虫採りで真っ先に思い出すのは、なんと言ってもマイマイカブリである。それまで主に



1985年3月10日、春の能登島採集会(左:筆者、右:中西氏)

ゼフの採卵などをしていた中西さんが、オサ堀りにのめり込んでいった経過は、氏みずからが翔52号に書いている。また、中西さんのオサ堀りデビューとなった1985年の春の能登島採集会の様子は、私が翔54号に書いたが、なぜか中西さんはこの虫が気に入ったらしく、以後オサムシに邁進していくことになる。この年の春から夏にかけては、二人で石川県の各地にトラップをかけて毎週のように見回った。登山を伴うトラップ採集は強靱な体力を要求され、中西さんが驚異的な馬力で穴を掘ってコップを埋めてゆく後を、私はフラフラと付いてゆきながら、トラップ液を入れて回った。従って、トラップ設置への貢献度からいったら9:1位だったと思われるが、獲物の配分はいつも平等どころか、私に余分に譲ってくれようとする中西さんだった。オサ堀りのシーズンがくると、積雪時のオサ堀りとい



1985年9月8日  
白山でトラップ設置  
(左:中西氏、右:筆者)

う気違いじみて効率の悪い採集に何度か同行したが、中西さんは、それでは飽き足らず、真冬の青森へ遠征して凍結した崖と格闘してきたりした。どうやらこの頃から中西さんの興味は、オサムシのなかでもマイマイカブリに集中していったようである。虫自体の魅力に加えて、他のオサムシに比べて、掘り出すのが容易でない点が中西さんのチャレンジ精神を刺激したのだと思う。とにかくマイマイを掘るのは抜群に上手かった。持ち前の体力と、本物の鶴嘴（つるはし）の破壊力もさることながら、中西さんの最大の武器は、どんな場所へ行っても瞬時にマイマイの居場所を見つけだしてしまう虫屋としての勘というか知恵だったと思う。今でも、未知の土地でのマイマイ掘り競争だったら、中西さんは日本中の誰にも引けはとらなかつただろうと思っている。1987年に中西さんは新潟県の粟島に行った。目的は言わずと知れた、この島固有のアオマイマイである。粟島に渡ったものの、まともに掘れるような崖も枯れ木もなく苦戦を強いられた中西さんは、生木の洞にマイマイが入っていることに気付いて沢山採集してきた。いまでこそ生木の洞はマイマイの越冬

場所のひとつとして良く知られているが、当時そんな知識は普及しておらず、中西さんは可能性のありそうな場所を探しまわった結果、自らの目で、この越冬場所を発見したのだと思う。この話には後日談がある。虫採りには徹底的なこだわりをみせる中西さんだが、標本にはあまり執着しておらず、この多数のアオマイマイも、仕事の忙しさにかまけてバケツに放り込まれたまま忘れられていたようである。しばらくして中西家を訪れ、アオマイマイが死んで腐敗しはじめていることを発見した虫友のひとりが、私に電話をよこして“完全に腐敗するまえに標本になりそうなものを回収しにこい”という。さっそく駆けつけ、なんとも香しい匂いを漂わすバケツから、まともそうな奴を数頭持ち帰り標本にした。この時のアオマイマイは、いまでも私のマイマイ箱の中で、前胸背の透明感のある紅色を燦然と輝かせている。

中西さんとは、その後1993年に私が名古屋に引っ越すまでの間に、100回以上一緒に採集に行った。遠出したのは佐渡と青森くらいで、石川県内での採集が多かった。特に印象に残っているのは釈迦道で、二人とも大好きだったこのブナ林を歩いていると、虫が採れても採れなくてもとてもハッピーな気分になれたものだった。また、白山の小桜平へも、避難小屋泊まりで2回でかけた。二度目は、それぞれの長男をつれて登り、四人で小屋の屋根に上がって、満天の星空をつぎからつぎへと横切る流れ星を眺めたのも懐かしい思い出である。私が名古屋、その後東京へと移ってからは、さすがに一緒に採集に行く機会は減ったものの、それでも記録を調べると12回も、いろいろな場所で落ち合っては採集をした。この中には、中西さんがみつけた福島県檜枝岐村でのアカヘリミドリタマムシの採集地も含まれており、発見者みずからの案内で、この珍品を採集するという贅沢な経験をさせてもらった。又、一度はまったくの偶然で蔵王の賽の河原で、出くわしたこともあった。エサキキンヘリタマムシがまだ珍品だった頃のことである。中西さんがいかに独創的な虫採りをしたかについてはおそらく多くの人が述べるだろうから、私は他の人には取り上げられそうもない2例を紹介したい。一つは石川県の昆虫写真集を作っていた時に、中西さんが撮ってきた、釈迦道の岩の下に越冬窟をつくっているホソヒメクロオサの写真。残念ながらピンボケで採用されなかったが、本種の越冬態をみたことのある人なんてほとんどいないのではないだろうか？ 岩の下で越冬しているに違いないと信じて、黙々と岩を起こし続ける中西さんの姿を想像するだけで頭が下がる。次は、愛知県を訪れた際に、設楽町でモミの立ち枯れから掘り出したアオタマムシの死骸。死骸とはいえ、多分愛知県2例目の採集例である。当日は、10名近い虫屋がカミキリの幼虫採集を主目的に出かけたのだが、巨大なモミの立ち枯れを削ってみたのは多分中西さんだけだった。とにかく他人とは異なる採集を指向していた中西さんとの採集行は、いつも刺激的だった。皆が狙って採れない虫を仕留めて“ホラッ”と差し出す時には、とびっきりの笑顔だった。もう二度と見るができないと思うと、悲しくてたまらない。

《のなか まさる 〒177-0042 練馬区下石神井6-9-6》



## 大雪の日 — 中西 重雄さんをしのんで —

澤 田 博

1986年1月26日は、早朝から雪となっていた。この年は、近年になく雪が多かったが、金沢市内はきれいに除雪されていた。

午前8時、中西さんを拾って、私の車で能登半島を北へ遡る。前夜の蝶談会の会合で中西さんと二人で能登へマイマイカブリを掘りに行く約束をしていたのだ。

どこへ行くかについては、これまでに行ったことのないところに決まっているけれども、なかなか結論が出ず、結局、中西さんご自慢の能登島産のモンロータイプ（大型の個体で、胴体がやや寸詰まりで妙に幅広く、はち切れそうに見える1匹で、中西さんが最も気に入っていたもの）を意識して、七尾湾の先端に行ってみることになっていた。

車窓からよさそうな場所を探す、能登は雪が深く、なかなか適当な場所が見つからない。それでも、田んぼの向こうに大きなモミの木が見え、田んぼに沿った農道の崖が黒々として、よさそうに見えた。「あそこにしましょう」という中西さんの意見で、脇道に入り、道端に車を寄せ、中西さんは業務用の長靴をはき、手にはそれ用にあつらえた特製のつるはしを持ち、私は登山靴にロングスパッツを付け、登山用のピッケルを持ち、めんどろとばかり、一直線に田んぼの真ん中を歩いて突っ切ることにした。積雪は、50センチとあったところだろうか。付近に人は見あたらなかったが、もしおられたら、我々はどんなふうに見えただろうか。

崖の近くに行くと、予想と違って条件は悪く、ほとんど掘るところはない。15分ほどやって、あきらめて次へ行くことにした。雪は降り続けている。

車は、平野部から山の中へ入って、両側には雪の積もった森林が広がっている。左右を眺めながら行くと、伐採したあとに朽ち木が点々と転がっている場所があった。今度は朽ち木ねらいで二手に分かれ、探すこととした。

雪はわりとしまっていて、歩きやすい。順番に朽ち木を当たるが、固くてピッケルの歯が立たない。10個ほどやってあきらめて、次へ行こうと声を掛けたが、離れているとみえて、「おーい」と呼んでも返事がない。しばらく行くと足跡があったので、それをたどることにしたが、一向に出会う気配がない。

そのうち一時雪がやんで視界が開けた。なんと、私は自分の足跡をたどってぐるぐる回っていたのだ。そのうち中西さんも見つかって、「全然だめ」とのことで、もうとにかく目的地の七尾湾の先端を目差していくことにした。

目的の七尾湾の先端に到着し、このへんだらうと、車を停め、適当に林道脇の崖等を探すことにした。

探すこと1時間、私は何にも採れない。中西さんがやってきて、「やっと採れましたよ」という。マイマイカブリを4つ採っていた。ちょっと崖がえぐれたような場所の上部にい

たということで案内してもらったが、こんなところでいう場所であった。採れたマイマイカブリもモンローどころか、ツイギーといえる貧相な小型のものばかり。中西さんは「これが完全だからあげましょう」といって、中でも状態のいい2匹を選んで私にくれた。これが、この日の全収穫。

帰り道、相変わらず雪は降り続き、金沢を目前とした河北潟の道路は圧雪状態になっており、50キロのスピードで快調に走っていた車は、わだちを外れ、タイヤが横ぶれしてハンドルを取られそうになり、思わずブレー



1985年11月「特製つるはし」を手に雪中オサ堀りに向かう中西氏

キを踏んだ瞬間、車は横を向いて道路脇に積み上げてあった雪面に激突した。それがなければ、水田にダイブしていた。

「今年は松井さんの4WDの車でくるくと回ったのと二回目だ」という中西さんに運転を代わり、ギヤを3速に落とし、安全運転で午後5時自宅到着。朝には雪がなかった駐車場には30センチの新雪が積もっていた。

「26. I. 1986 Uura Nanao City」ラベルのある標本は、今も標本箱の片隅にある。

故中西重雄さんのご冥福を祈ります。

《さわだ ひろし 〒920-0935 金沢市石引1-16-11》

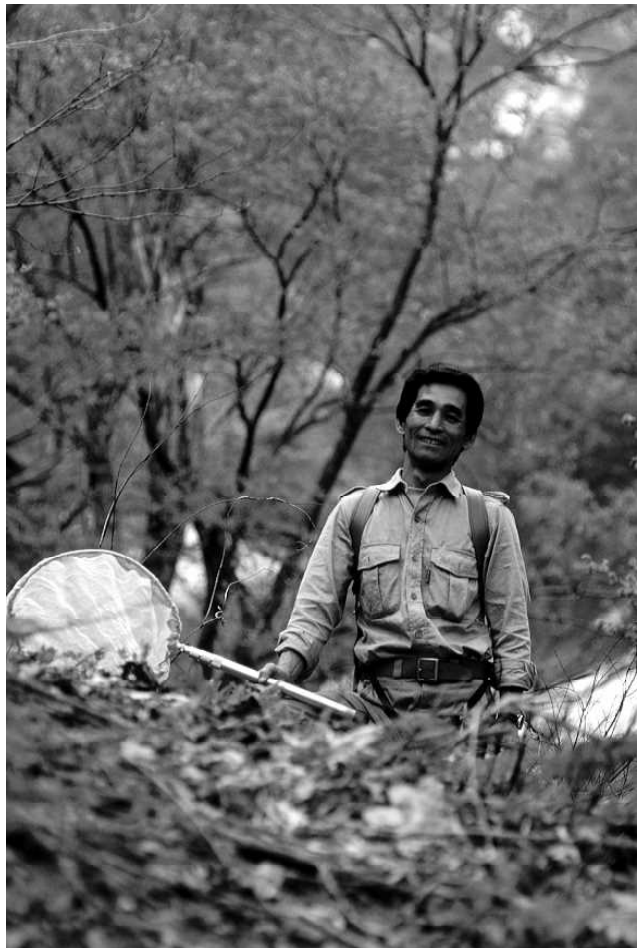
## 採るのが上手かった中西さん

指 田 春 喜

小生がこの「百万石蝶談会」に入会したのは、1988年と記憶する。中西さんは、この頃にはもう「蝶屋」を止め、オサムシ・カミキリ採集に興味が移っていたように思う。また、標本づくり（コレクション）には淡白であったようだが、チョウ・オサムシ・カミキリを問わず、採集は上手かった。完全「蝶屋」の小生は、採集には数回しかご一緒したことがないが、記憶に残るのは、いつも「採るのが上手いなあー」ということである。

1990年7月1日、会員7～8名で福島県柳津町にキマルリを採りに出かけた。早朝、まだ暗いうちに到着後、直ぐに長竿を用意し始め、「桐の木からたたき出すのだ」と言う。小生のこれまでのキマルリ採集の常識からは考えられない。昼過ぎから夕方にかけてヒメジョオンに飛来する個体をネットするものと頭から思っていた小生は驚いた。そして、この先頭に立っていたのが中西さんであり、最初の1頭を手にしたのも中西さんと記憶する。その後、他の者も採集できたが、最後まで採れなかったのが小生であり、帰り際になり、やっとヒメジョオンに飛来した個体を3頭採集でき「これで帰れる」と安堵したのを覚えている。

1993年8月8日、やはり会員7～8名で白山釈迦林道に夜間採集した帰りに「三子牛」でホソハンミョウを採ろうということになった。少し前に中西さんたちが当地で採集済みなので、当日参加の会員は「2匹目のドジョウならぬ、数10匹目のハンミョウ」を狙い、また「数の上乘せ」を目論んだのだろう。「蝶屋」の私は正直言って、前夜の寝不足もあり早く帰りたかったが、そうも行かずお付き合いをした。このとき中西さんは、ご都合が悪かったようで参加されていなかったが、会員らはいくら捜しても目的のハンミョウが採れず、「中西さんを呼び出してその採集のコツを教わろう」ということになった。電話で現地に呼び出された中西さんは「どこにいるんだよ」と聞かれるのに対して、「忙



蝶屋の頃の中西重雄氏(1984年5月河内村にて)

しいのになあ」と言いながらもまんざらでもない様子であり、いとも簡単にみつけてしまった。

2001年5月12日、小生を入れ4名で秋田県象潟に最北のギフを採りに出かけた。この時、既に中西さんはギフの採集など当然まったくやってなかった。小生は、同行者というより象潟に連れて行ってもらえる人が欲しくて、3人をたきつけたのである。ポイントは当方が事前に聞いていた。最初の1頭は同行のH氏がメスをネットした。その後、小生もいくつかを採集できたが、全てメスであった。すでに「蝶屋」を廃業した中西さんはギフ採集用の口径の大きいネットを持っているはずもなく、今では小学生の子供が持つような口径30cmの小さなネットを手にしていて、それでもしっかり1つは採集しており、この日、唯一のオスを振り逃がしたことを盛んに悔いていた。当日、小生はもちろん他の2人の前にもオスは現れなかったのに……。

やはり中西さんは、引きが強く、採集上手だったのだなあー。

心からご冥福をお祈りする（合掌）。

《さしだ はるき 〒920-0931 金沢市兼六元町11-27》

## 中西重雄さん、長い間ありがとうございました

松 井 正 人

中西さんと知り合ったのは、1982年の蝶談会の例会だった。1978年に発会した蝶談会の例会場は決まった場所が無く、その時は、小立野の崎浦公民館で午後7時から始め、公民館が閉館する午後9時までの例会だった。これを知った中西さんは、ご自宅に隣接する事務所で開催を勧めてくれ、同年の12月から時間無制限の「城南管工例会」が始まった。ご夫妻の厚意によって、いつも飲み物とお茶菓子が準備された例会は、快適そのもので、午後7時に始まった楽しい虫談義は、翌朝の2時に及ぶ事もあった。我々会員が帰った後は、中西さんがひとりで後かたづけをしていた。この「城南管工例会」は、場所は途中で城南管工新社屋に移ったが、スタイルはそのままで、2006年2月まで続いた。1982年に始まった「城南管工例会」は、中西さんの厚意に支えられて25年間に157回開催されている。中西さんは、例会の顔そのもので、例会へ行けば必ず中西さんの笑顔が迎えてくれた。この笑顔が、心地よく楽しい例会の源だった。

中西さんの原点は、「みんなで楽しく」であり、天候に恵まれない採集会や虫が採れない採集会でも、氏が参加したものは後々まで語り継がれる笑い話がつきない。この「みんなで楽しく」は、家族までをも巻き込んだ「採集パーティー」へと発展した。基本形は、「採集会」＋「昼食パーティー」で、回が進むに連れ「昼食」が「夕食」に変化したり、「アルコール」や「カラオケ」のオプションが付いたりもした。最も盛大だったのは、

1991年5月の採集パーティーで、スタイルは、「採集会」＋「昼食パーティー」＋「アルコール」だった。参加は、中西4人、井村9人、野中4人、松井5人、上田3人、細沼4人、沢田3人、康3人、中林2人、中川1人の総勢38人。場所は、河内村内尾の河原。午前中に、虫と山菜を採集し、河原で山菜テンプラを揚げ、午後は、これを食べながらのパーティーとなった。大人は、アルコールが入り楽しくやっているが、子供は、次第につまらなくなってくる。そこで中西さんは、石投げや笹舟競争など、川面を使ったいろんな遊びを繰り出した。これには、子供だけではなく大人も参加する程だった。



↑

第10回採集パーティー  
1994年5月3日セイモア

→

第1回採集パーティー  
1983年10月16日加賀沢



中西さんには、誰もが採れない虫を思いも寄らない場所から見つけだす、抜群の採集センスの良さから、その道に長けた人達を驚かせ、北陸の秘密兵器と言われる面もあるが、みんなで一緒に楽しく遊ぶセンスは、それこそ天下一品で、その裏には、「もてなし」と「気遣い」の心が溢れていた。

中西さん、いつの間にか25年が過ぎていました。いつもお世話になり、虫を通じて、みんなと楽しく過ごしながら、共に楽しむことをたくさん教えてもらいました。本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

## 会員の動き・しゃばの動き

### ■虫の声を聞き分けるオモチャ

秋の夜長、暗闇からはコオロギ、カンタンなど、いろんな虫の声が聞こえてくる。この声が聞き分けられたら、どんなに楽しいことだろう。区別が難しいエゾゼミ3種の声を聞き分ける音声解析に、森林総研東北支所が成功した。開発が進めば、虫の声を聞き分けるオモチャが出来るかもしれない。

### ■舢倉島で観察される特異な蝶

島の周囲が約4km、最高海拔が12.4m、平坦で小さな島にもかかわらず、島は渡り鳥の一大飛来地として有名で、観察種数は330種を越えている。蝶の観察種数は、15種と少ないが、アサギマダラ、キベリタテハ、リュウキュウムラサキなど特異な種類が含まれている。

### ■宝達山のアサギマーキング千頭を越す

9月24日、宝達山の年間マーキング数が昨年に引き続き千頭を越した。毎年9月になると大勢のマーカ―に交じって常連さんも顔を見せ、「山の龍宮城」が交流の場になっている。今年は、今浜の堀さんご夫妻の活躍がめざましく、全体の4割を2人でマーキングしている。

### ■日吉氏、舢倉島にとぶ

うねりが強く、波間を漂う船に、二の足を踏んでいた日吉氏だったが、島初記録の蝶出現に、渡島を決断。やっとの思いでたどり着いた島だったが、蝶がいない。さっきまで飛んでいたのにと写真を見せられては、なおさらおさまらない。

### ■日本海のだ真ん中で

日本海のだ真ん中、大和堆の周辺では、どんな虫が採れるだろうか。来春からの話だが、1回に10日ほどで、年に5~6回のチャンスが巡ってきた。とりあえずは、何でも採る。何が採れても面白い。

### ■刈安山で双眼鏡と鷹柱を観察

10月7日、アサギマダラに未練が残る松井氏、刈安山へ出かけたところ、頂上展望台では、数人の鳥屋さんが双眼鏡とにらめっこしていた。近づけば「松井さん」と声がかかり、双眼鏡の後から矢田氏の顔が現れた。更には、海岸のアサギ調査で大変お世話になっている林氏や林夫人の顔が次々と現れた。それも束の間「鷹柱」の声に、顔は一斉に双眼鏡の後に隠れてしまった。

### ■舢倉島のマツノマダラカミキリ

渡島の目的は鳥見だったが、虫と2足のワラジを履く矢田氏は、蝶3種を観察し、カミキリ2種を採集。マツノマダラが採れたが、島のマツ林はこの先どうなるのでしょうか。

### ■熊も恐れずメスアカ求めて医王山通い

細沼氏、メスアカミドリ輝きに惑わされたのか、熊が頻繁に出没するにもかかわらず、医王山に通い詰めている。歌っていれば安心とか言っていたが、「籠の鳥」でも、口ずさんでいたのだろうか。

### ■日吉氏、沖縄疲れか腰痛に泣く

喜び勇んで沖縄に出かけた日吉氏だったが、蝶の少なさに、いささかガックリ。せっかく来たからにはと、30度を越す暑さの中、

あちらこちらと駆けめぐって採集していたところ、自宅に戻るやドッと疲れが出たようで、腰痛と脚痛に泣いている。

### ■アサギマダラのような優雅な舞

1円玉より軽い手の平サイズの模型飛行機が、体育館の中をフワリフワリと旋回した。0.88グラムの日本一軽いインドアプレーン、色こそ違い、大きさや飛び方はアサギマダラにそっくり。手元のコントローラで自由自在に操れ、30分の充電で5分間、空中を舞う。

### ■トゲナナのために溝掃除

11月から12月は、トゲナナフシの観察シーズン。街灯に照らされる水路は絶好のポイントとなるが、この時期は落葉が溜まったり、草に覆われたりしている。トゲナナ命の松井氏は、トゲナナのためならなんでもできると、落葉かきや草刈りに励んでいる。ただし、街灯の下だけ。

## ■ 例会の記録 ■

10月5日（木）浅地メッキ2階にて、午後8時から開催。

今回は、長田（おさだ）氏が、簡単に作れる展翅板を紹介。ファルカタ集成材を使うので、どんな展翅板でも1本500円もかからない。断面の型紙を作り、カッターで切断した集成材を型紙に合わせて、グルーガンで固定してでき上がり。傾斜板は、平板を斜めに固定するのがミソ。

その他の話題は、ムラサキツバメの今年の発生地、ミヤマアカネは増えている、加賀市でオナガサナエ、カバマダラと見まがうツマゲロのメス、トゲナナフシは燈火の下で待っている、糞虫を探す目印はティッシュペーパー、などなど。

参加は、浅地、松井、吉岡、井村、長田、大脇の6人。

### ■ ■ 表紙デザイン：小幡英典 ■ ■

## 目 次

浅地哲也：金沢市街地に於けるコシボソヤンマの記録	1
松井正人：石川県で5月にムラサキツバメの孵化殻多数を発見	2
井村正行：中西氏との思い出のヒゲナガホラヒラタゴミムシの採集記	3
野中 勝：スーパー虫屋だった中西重雄氏	5
澤田 博：大雪の日 —中西 重雄さんをしのんで—	8
指田春喜：採るのが上手かった中西さん	10
松井正人：中西重雄さん、長い間ありがとうございました	11
編集部：会員の動き・しゃばの動き	13

## 翔 183号

Tobu 2006年12月10日発行  
百万石蝶談会  
金沢市大場町東871-15 松井方

<http://homepage3.nifty.com/100man/>

☎920-3121 ☎076-258-2727  
郵便振替 00750-8-562  
印刷 小西紙店印刷所

